

第十五講 枕草子

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

鶯は、ふみなどにもめでたきものにつくり、声よりはじめてさまかたちも、

さばかりあてにうつくしき程よりは、^A九重^aのうちになかぬぞいとわろき。

人の「सानんある」といひしを、^Bさしもあらじと思ひしに、十年ばかりさ

ぶらひてききしに、まことに **1** 音せざりき。さるは、竹ちかき紅梅も、

いとよくかよひぬべきたよりなりかし。 **2**、^bあやしき家の見どころも

なき梅の木などには、かしがましきまでぞなく。よるなかぬもいぎたなき^c

心地すれども、今はいかがせん。夏・秋の末まで老いごゑに鳴きて、「むし

くひ」など、^dようもあらぬ者は、名を付けかへていふぞくちをしくくすし

き心地する。それもただ、雀などのやうに常にある鳥ならば、^cさもおぼゆ

まじ。春なくゆゑこそはあらめ。「年たちかへる」^Dなど、^Dをかしきことに、
10

歌にも文にもつくるなるは。なほ春のうちならましかばいかにをかしからま

し。人をも、人げなう、^E世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをばそ

しりやはする。鶯、^{とび}鳥^{からす}などのうへは、見入れきき入れなどする人、世にな

しかし。されば、いみじかるべきものとなりたれば、とおもふに、^F心ゆか

ぬ心地するなり。

(注) ※「年たちかへる」 素性法師「あらたまの年たちかへるあしたより待たるものは鶯の声」

問一 傍線部A「さばかりあてにうつくしき程よりは」の解釈として、次の①～⑤のうち、どれが最も適切か。一つを選び、番号で答えよ。

- ① そんなに優美で美しい時から、
- ② それほど上品でかわいいわりに、
- ③ そんなに頼みがいがありかわいいにもかかわらず、
- ④ それほどなまめかしく正気である頃からは、
- ⑤ そんなにあでやかで愛らしいところもあるが、

問二 傍線部a・b・c・dの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

a 九重

- ① 僧坊
- ② 古巢
- ③ 山荘
- ④ 竹やぶ
- ⑤ 宮中

b あやしき家

- ① 粗末な家
- ② 意外な家
- ③ 奇怪な家
- ④ 神秘的な家
- ⑤ 無気味な家

c いぎたなき心地

- ① 隠れている感じ
- ② 行儀わるい感じ
- ③ いりびたっている感じ
- ④ 寝坊であるという感じ
- ⑤ 行き倒れた感じ

d ようもあらぬ者

- ① 容色がおとろえた者
- ② 言ってはならないことを言う者
- ③ 身分や教養がない者
- ④ 用事もない者
- ⑤ 世間に無用の者

問三 傍線部B「さしもあらじ」を、「さ」の内容がわかるように口語訳せよ。

問四 空欄1・2に適切なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

- 1 ① とみに ② いと ③ え
④ さらに ⑤ そこら

- 2 ① まかでてきけば ② まうでてきけば
③ まかりてきかば ④ まりりてきかば
⑤ はべりてきけば

問五 傍線部C「さ」は何を指すか。次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- ① 老いごゑに鳴き ② 「むしくひ」など
③ ようもあらぬ者 ④ 雀などのやうに
⑤ くちをしくくすしき心地

問六 傍線部D「をかしきことに、歌にも文にもつくるなるは」の解釈として、次の①～⑤のうち、どれが最も適当か。一つ選び、番号で答えよ。

- ① 趣のあることとして、和歌にも漢詩にも作っているようであるよ。
② おもしろいこととして、和歌にも手紙にも書くそうであるよ。
③ 風情のあることとして、和歌にも漢詩にも作ったのであるよ。
④ みごとに、古歌にも手紙にも書いたのだよ。
⑤ 滑稽なことに、古歌にも古文にも作ると聞いているよ。

問七

傍線部E「世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをばそしりやはする」の解釈として、次の①～⑤のうち、どれが最も適切か。一つ選び、番号で答えよ。

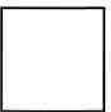
- ① 世間での人望がばかばかしく思いはじめた人は人の悪口を言ったりしない。
- ② 世間の評判がいかがわしくなり出した人を誰が悪く言うものか、言わない。
- ③ 世間での感興を失いかけた人はその感興を非難したりしない。
- ④ 世間での自信が持てなくなった人は互いにけなしあいをする。
- ⑤ 世間の人の記憶から遠ざかった人を知ろうとするだろうか、しない。



問八

傍線部F「心ゆかぬ心地するなり」は、鶯についての作者の思いであるが、鶯のどういう点についてそう思うのか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から選べ。

- ① あやしき家の梅の木で鳴くこと
- ② 夏秋の末まで老い声に鳴くこと
- ③ 漢詩や和歌にもつくられていること
- ④ 春の間だけしか鳴かないこと
- ⑤ 鳶や烏と同列に扱われていること



第十五講

随筆

作者が心に浮かんだ事、見たり聞いたりした事など思いのままを筆にまかせて書いた文章

【平安】

枕草子 清少納言 1000

日本最初の随筆文学。約三百段。

清原元輔の女むすめをかしの文学。中宮定子（関白藤原道隆の娘・一条天皇の后）に仕えた。

三種類に分類する。

①類集段「物尽し」
「は」型
（山は・川は・鳥は etc.）
「もの」型
（うつくしきもの・すさまじきもの etc.）

②随想段 作者の感じることを書いてある段
（春はあけぼの……etc.）

③回想段「日記」（宮にはじめて参りたるころ〜 etc.）

【鎌倉】

方丈記 鴨長明 1212
（初期）

和漢混交文。仏教的無常観（作者が目にした大火・大風・福原遷都・飢饉・大地震などこの世の無常のさまを写實的に描いている）。厭世観。対句・比喩が多い。

徒然草 吉田（卜部）兼好
（末期）

1331

自然観・人生観。

主題↓具体例↓結論

結論↓具体例

具体例↓結論

※鴨長明と吉田兼好は時代は二人とも鎌倉時代でジャンルも同じだが二人は会ってはいない。

【江戸】

折たく柴の記

新井白石

駿台雑話

室鳩巢

玉勝間

本居宣長

花月草紙

松平定信

琴後集

村田春海

重要

鴨長明といったら

『方丈記』 (随筆)

『発心集』 (説話)

『無名抄』 (歌論)

ふみ【文・書】

- ① 手紙
- ② 書物 → 漢籍
- ③ 学問 → 漢学 → 漢詩文

さ → そう
かく → このように
しか → そのように

指示副詞

ばかり (副詞)
程度 (ゴロ・ホド)
限定 (ダケ)

あてなり【貴なり】

- ① 身分が高い・高貴である
- ② 優美である・上品である

より

① 起点(ノカラ)

・寝殿より御堂の廊にかよふ女房
(ノ寝殿から御堂に通じる廊下を通る女房)

② 経過(ノヲ通ツテ)

・前より行く水
(ノ前を通って流れる水)

③ 即時(ノスルトスグニ・ノヤイナヤ)

・まゐりつくより
(ノ参上するとすぐに)

④ 手段(ノデ)

・徒歩かちより
(ノ徒歩で)

⑤ 比較(ノト比ベテ)

・都の空より雲の往ゆき来きも早はやき心こころちして
(ノ都の空よりは雲の行き来も早いように感じられて)

うち【内・内裏】

九重

雲の上

雲居

禁中

宮中

よし … 良い (プラスイメージ)

よろし … 悪くはない・

普通だ || けしうはあらず

わろし … 良くない

あし … 悪い

し

←

副助

も

←

係助詞

強意

はべり (侍り)
さぶらふ (候ふ)

〈謙讓〉

お仕え申し上げる

〈丁寧〉

です・ます・ございます

※平安時代の文章で「さぶらふ」が出たら
謙讓から入ってみる

さらに——打消
全く・決して・少しもくない

いと
いたく
たいして・あまりくない
打消

にはかなり (にはかに)
とみなり (とみに)

急に・突然に

さすがに
さりとも
さるは

そうはいつでもやはり

たより【便り】

- ① よりどころ
- ② 機会・ついで
- ③ 縁・ゆかり・関係
- ④ 配置

かし（念を押す終助詞）

ヨ！ ネ！

あやし【怪し・賤し】

- ① 不思議だ
- ② 身分が低い
- ③ いやしい
- ④ 見苦しい
- ⑤ みすぼらしい

↑ 参上スル

まゐる・まうづ



まかる・まかづ



退出スル



いぎたなし【寝汚なし】

①寝坊である

②ぐっすりと寝ている

いかが（は）せむ

疑 どうしようか

反 どうしようか、いやどうしようもない

よき人

身分・教養が高い人

よからぬ人

よくもあらぬ人

あたらし

くちをし

くやし

ほいなし

をし

残念である

あはれ

をかし

おもしろし

趣深い

《ハイレベル》

四段・上一段は終止・連体が同形なので伝推か断定か区別できない。そこで前後から意味を決めないといけないが、ここはとりあえず三つ覚えよう！

○ (終止・連体同形) + **なる** + 体言 → 伝聞推定

・ 籠手とかやいふ **なる** 物を(「いふ」は四段活用動詞で、終止形も連体形も「いふ」)

・ 心恥づかしき人住む **なる** 所にこそあなれ(「住む」は四段活用動詞で、終止形も連体形も「住む」)

○ 〈音・声〉—— **なり** → 伝聞推定

・ しばしありて、先たかう追う声すれば、殿、参らせ

同形 伝推
給ふ **なり**「とて

○ ぞ・なむ・や・か——同形 **なる** → 伝聞推定(「こそ同形なれ」の「なれ」も伝推)

・ 文箱に入れてありと **なむ** **いふ** **なる**

cf. 形容詞の補助活用の連体形 + なり → 伝聞推定

・ 美しかる **なり** (伝推) ⇄ 美しき **なり** (断定)

文末の「は」は詠嘆の終助(係助)

ましかば——まし

(ませば——まし)

せば——まし(和歌のみ)

(モシ)くダツタラ…ダロウニ

かずならず【数ならず】

①人の数にも入らない

②物の数ではない

③取るに足りない

cf. ひとげなし

人並みでない・人間らしくない

おぼえ

聞こえ

評判

おぼえ

①評判

②寵愛

③人望

鶯は、(和歌は当然)漢詩文などにもすばらしいものとしてつくり(すばらしい鳥として歌われ)、声から(声を)はじめとして姿や形も、それほど(あれほど)上品で美しい(または、かわいらしい)のと比べると、宮中の中で鳴かないのはたいそうよくない。ある人が「そうある(鶯は宮中の中では鳴きませんよ)」と言ったのを(または、言ったけれども)、(私は)「そんなことはあるまい(鶯が宮中の中で鳴かないということはあるまい)」と思っただけでも、(私は)十年ほど宮中に(中宮定子様に)お仕え申し上げて聞いていたけれども、本当に(その通り)まったく鶯の声を聞かなかつた。そうは言ってもやはり(鳴かないと言ってもやはり)(宮中)は竹が近くにあり紅梅も(あつて鶯が)たいそう頻繁にきつと通つてくるはずのよりどころであるよ(きつと通つて来てもいい格好の場所なんですよ)。宮中から里へ退出して聞くと、いやしい家の(なんの)見どころもない梅の木などには、うるさいほどやましくらいに鳴く。(それに鶯は)夜に鳴かないのも寝坊な気持ちがするけれども、いまはどうしようか、いやどうしようもない(寝坊な鳥でいやだと思ふけれども、これは生まれつきの習性だとすれば、いまさらどうしようもない)。 (それから鶯は)夏(から)秋の末まで老い衰えた声で鳴いて(いるのでそれを)「ムダ飯食い」など、身分・教養がないものは、名前をつけかえて呼んでいるのが(私は)残念で奇妙な気持ちがする。それもただ、(鶯が)雀などのようにいつもいる鳥であるならば、そのようにも思われまいだろう。鶯が春鳴く(すばらしい)鳥であるから(そう思われる)のであろう。「年たちかえる」などと、趣深いものとして和歌にも漢詩にも詠むようであるよ。やはり鶯がもし春のうちだけに限つてなく鳥であつたならばどんなに趣深かつただろうに。人間でも一人前でなく世間の評判も悪くなりはじめた人を(誰が)悪く言おうか、いや誰も悪く言わない。(それと同様)鶯や鳥などのことについては(ようするに、そんな平凡な鳥に対しては)とりたいわけ)注意して見たり注意して鳴き声を聞いたりなどする人は、世間にはいないよ。だから、(鶯は)「たいそうすばらしいはずのものとなつているので(悪口を言われるのだ)」と思つたと、満足できない気持ちになるのである。

(注)新しい年に改まつた正月の朝から心待ちにされるものといえはそれは鶯の声であるよ